



日本女性会議 2025 檜原

北海道情報大学
経営情報学部システム情報学科
堀井杏珠

参加のきっかけ

10/3分科会について

10/4全体会について

10/5かしはる未来会議について

交流会について

今後に向けて



北海道情報大学 経営情報学部システム情報学科 堀井杏珠



参加のきっかけ

男女共同参画の仕組みはあるのに…
社会的な性差が埋まらないのはなぜ?
→内面的なバイアスがあるから

日常での気づき

- 「女の子なんだから」
- 性の多様性ってへン?
- 就職への不安

 北海道情報大学 経営情報学部システム情報学科 梅口香津

はじめに：学校のサイトで広報が出ているのをみてはじめて日本女性会議について知った

参加のきっかけ：日本女性会議の概要を調べて、自分をとりまく環境について考えた

- ・日本の現状について

現代においては男女共同参画が進んでおり、制度的に女だから・男だから なれない役職・できない仕事はなくなりつつある。

それにもかかわらず、日本の社会的な性差が埋まらないのは、我々の内面的な問題(バイアスなど)が存在するんだろうと考えた。

- ・日常での気づき

日常でも、バイアスを感じるような経験があった。

例)

家族から「女の子なんだから～しなさい」と言われた

友達と LGBTQ+について話しているときに、排他的な意見を聞いた

そんなとき、咄嗟に説得力のある反論ができなかった自分に悔しさを感じ、

日本女性会議を通して、自分の知識を広めて論理的な言葉にしたいと考えた。

また、就職において自分の希望している業界は男性比率が高いので、女性として最前線で活動する方々の意見を聞いてみたいと感じた

分科会5
子どもの「自分らしさ」と
「生きにくさ」をめぐって

講演内容

- ・乳幼児の発達障害と支援
- ・中学生から増える不登校について

→子どもの特性の尊重

→子ども・支援者の相互理解

・学びの多様化学校

北海道情報大学 教育情報学部システム情報講義杏珠

分科会 5

[問題提起]

近年、発達障害や不登校など、多様な背景を持つ子どもたちが増加しており、多様な学びや支援の在り方への転換が求められている。

[講演内容]

発達障害（講演内のモデルケースは自閉スペクトラム症）はスペクトラムであり境界があいまいなものである。支援者は、発達障害において現れる問題行動を「困った行動」として受け取るのでなく、「要求の表現」であることを理解すべき。子供に「自分の心が分かってもらえる」という経験を与えることが重要。

相互理解という点では、発達障害のみならず不登校も例に挙げられた。支援としては、子供が自分の世界に浸ることを許容し、子供自身の動きを待つべきであると述べられた。

これらに対するアプローチとして、奈良県にある学びの多様化学校 ASU の紹介が行われた。学びの多様化学校とは学校復帰を目的とせず、あくまで学びの一方法としての選択肢で子どもの進学をサポートする。

障害は本人の内にあるものではなく、環境とのミスマッチによって生じるものである。社会との不一致がなければ、それは「個性」として尊重されるべきものであると述べられた。

[所感]

- ・学びの多様化に対するアプローチとして、学びの多様化学校の導入は有効だと感じた。北海道には該当する施設が札幌にしかないので、多様な地域で導入すべき
- ・不登校への支援として、子どもの支援はもちろんその保護者への支援が挙げられた。不登校になって焦りや不安を感じるのは子どもだけでなく保護者もそうであるので、子どもと保護者の距離を考慮した支援が必要であると感じた。
- ・また、障害は社会との齟齬が生じなければ個性であるという考えについては、前向きな考え方だと思うが「個性」で済まされることで苦しい思いをする人がいると思う。支援が必要な人が、正しく支援を受けられる環境を作ることが重要だと感じた。

分科会9

 子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないため

講演内容

- ・いのちの安全教育
- ・性の多様性に関する教育
- ・包括的性教育
- こどもの主体性・人権の尊重
- 大人の意識改革と責任



北海道情報大芸術情報学部システム情報系研究会

分科会 9

[問題提起]

子どもたちを DV や性暴力の被害者・加害者・傍観者にさせないために、現代社会が抱える複合的な課題と、それが子どもたちの安全や人権に及ぼす影響を踏まえ、教育のあり方を考察する。

[講演内容]

講演では、デート DV や性の多様性、教育機関での性教育を例に、子どもたちを取り巻く現代の「性の環境」について整理された。SNS の普及により、子どもたちが被害者のみならず加害者にもなり得る現状がある中で、「知識としての性教育」だけでなく、「自身の人権に焦点を当てた包括的性教育」の必要性が強調された。

・性の多様性について

LGBTQ+への理解や情報発信を行う大人が少ないことから、子どもたちは将来の自己イメージを描けず、自分を受け入れられない状況が生じている。これに対して、若い世代から性の多様性を学び、本人の判断を尊重する教育が求められる。また、周囲の人々もアウティングなどに十分配慮し、受け入れる姿勢を持つことが重要である。

・性教育について

性をタブー視する社会的風潮の中で、子どもが性の悩みを相談できる相手がないことが課題となっている。子ども自身が自分のバウンダリー（境界）を意識し、NO を言いやすい環境をつくることが重要である。

さらに、教育の時間や人員の不足、性教育をタブー視する教育者世代の知識不足も課題として挙げられた。そのため、世代を超えて性に関する正しい知識を共有し、定着させることが必要である。

[所感]

・教育する側の知識不足という視点は新たな気づきであった。

特に、デート DV や性被害の相談を受ける参画ネットならのスタッフには、実際に性被害の経験を持つ人もおり、相談者にとっては安心感がある一方で、「傷ついた人が傷ついた人を支える」という構図に課題を感じた。このような状況を防ぐためには、被害が起こる前に対策を講じる予防的な教育の重要性を

改めて認識した。

・性の多様性については、身体の性と心の性の間で、社会的にもさまざまなジレンマが生じると感じた。そのため、単に「本人の判断にすべてを委ねる」ことが必ずしも賢明とは言えないと考えた。しかし、実際に多様な性のあり方をもつ当事者の話を聞く中で、彼らの主張は決して特別なものではなく、「あたりまえの人権」を求めるものであることが理解できた。このように、当事者の声に直接触れる機会は、教育において非常に重要であると感じた。

全体会 未来にも輝ける スポーツライフを目指して

講演内容

- ・スポーツに対する女性の向き合い方
- ・自分の体と心に向き合う姿勢
- 〔心身のケアとメンタルサポート
プレッシャーとの向き合い方〕



北海道情報大学 総合情報学部システム情報学科 杏珠



元プロマラソン選手 裕子氏
天理大学体育学部教授 田里千代氏
人間学部人間関係専攻ひなた(創作ダンス部)
体育学部体育学専修舞氏剣道部)

[講演内容]

シンポジウムでは、女性選手のスポーツにおける活躍と課題について議論された。男性指導者の多さによる女性の身体や精神への無理解、ハラスマントなどの課題から、教育の重要性について示唆された。なかでも男女を分けて教える現行制度にも課題があり、「男女ともに正しく学び、声を上げることが必要」と強調した。

有森裕子氏は現役引退後に心身への理解を深めた経験から「自分で自分を褒める」「自分の体と心に責任を持つ」ことの重要性を語った。プレッシャーを「生きている証」と捉え、苦しさを前向きに変える姿勢が強調され、スポーツを通じて自己理解と他者尊重を育む教育の必要性が示された。

[所感]

有森氏は、スポーツにおける「やらされている感」を問題視し、すべての行動は自己決定のもとで行うべきだと述べた。この考え方はスポーツに限らず、学業や将来のキャリアなどあらゆる場面に通じると感じた。特に「嫌ならやめるべき」という言葉は、自分の現状を見つめ直すきっかけとなった。自分もなんとなく続けている勉強や活動があり、なぜそれを続けているのか、何を目指しているのかを改めて考える必要があると気づかされた。自分の意志で選び、責任を持って行動することの大切さを実感した。

全体会 ポジティブ脳で 幸せに過ごすために

講演内容

- ・自分を知ることの大切さ
- ・ポジティブなマインドづくり
- 〔心と体との向き合い方
コンプレックスとの向き合い方〕



北海道情報大学 総合情報学部システム情報学科 杏珠

[講演内容]

アンミカ氏は、ポジティブに生きるために心身のあり方について述べた。

中でも自己理解が大切だと述べ、好き嫌いや心地よさの感覚は五感で感じるものであり、自分の反応を理解することで生き方の軸ができるという。

例として、身体の面では、姿勢や呼吸、笑顔、目線、会話の仕方など、日常の所作が人の印象や心の状態を左右するとし、「調身・調心・調息」を意識することを強調した。

心の面では、コンプレックスも見方を変えれば強みになると語り、被害者意識は周囲に悪影響を与えるため、起こった出来事を「学び」として受け入れる姿勢が必要だとした。差別や怒りに対しては、柔軟に考え、相手を責めずに思いを言葉で丁寧に伝えることが大切だと述べた。

過去の不運を「GIFT」と捉え、今を信頼し感謝する姿勢こそが、前向きに生きる力になると締めくくった。

[所感]

アンミカ氏の講演を通して、前向きに生きるためにマインド面だけでなく、自分の体としっかりと向き合うことも大切だと感じた。彼女の姿勢や豊富な経験から語られる言葉には説得力があり、知識は確かに力であり、自ら学び続ける姿勢の重要性を実感した。また、対人関係における「嫉妬」についての話も印象的だった。自分はつい周囲と比べて羨ましく思ってしまうことがあるが、「嫉妬の人」にならず、素直に「どうしたらそうなれるのか」を学び取る姿勢が大切だと感じた。今後は、うらやましいと感じる相手の良さを前向きに取り入れられるような素直さを身につけたい。

全体会 大学生と考える！ ジェンダー平等って何ですか？

講演内容

- ・ジェンダー活動の広がり
- ・若者のジェンダー感
- ・トークセッション『ジェンカレ』より
学生の活動について



一般社団法人ENCOURAGE代表理事
櫻井彩乃氏



北海道情報大学 経営情報学部システム情報学科杏珠

[講演内容]

櫻井彩乃氏の講演では、若者によるジェンダー平等への取り組みの広がりが紹介された。櫻井氏は、高校時代に感じた違和感をきっかけに活動を始め、現在は「Torch for girls」や「ジェンカレ」などを通じて、若者の意見を政策に反映させる取り組みを行っている。若者世代のジェンダー観は、性別にとらわれず働き方や生き方を考える傾向が強く、社会貢献やジェンダー平等に積極的な企業への関心も高い一方で、ジェンダー平等が女性優遇であるといった意見があることも示唆された。

ジェンカレについてのトークセッションでは、学生たちが多様な視点から課題を共有し、友人とジェンダーについての交流をしたり、校内の図書館で女性史についての特集を行ったりと学校生活などで活動を行っている姿が印象的であった。今後も学びと発信を重ねながら、次世代へより平等な社会をつなぐ意識が広がっている。

[所感]

櫻井さんが若くしてジェンダー問題に積極的に取り組む姿勢に強く感銘を受けた。トークセッションに参加した学生たちは、生理や性的マイノリティ、教育、文化的慣習など多角的な視点から意見を交わしており、その広がりに刺激を受けた。特に「祭事における男女の分け方も文化の尊重としての平等になりうる」という意見は、平等と公平の違いを考える上で興味深い視点だと感じた。また、学生が自らの身体のことをオープンに語る場面もあり、タブー視されがちなテーマを率直に共有できる空気感が印象的だった。こうした風通しのよい対話の場が、今後さらに広がっていくことを願う。



中高生が市に対して自らのアイデアを提案する場が設けられていること自体が非常に意義深いと感じた。提案内容は、登下校時の安全確保に向けた電灯設置や交通安全の啓発、さらに娯楽施設や交通手段の改善など幅広く、若い世代ならではの柔軟な発想力に感心した。また、アプリ開発の構想など、実現性を意識した完成度の高い提案も多く、中高生のスキルや思考力の高さに驚かされた。このように学生が大人と対等に意見を交わし、地域づくりに関われる機会は、他の自治体にも広がってほしいと感じた。



交流会では社会人の方が多く、最初は緊張したものの、男女共同参画に関わる多様な分野の人々と交流できる貴重な機会となった。来年から始動する男女共同参画機構の取り組みについて直接話を伺い、新たな学びを得たほか、女性としてのキャリア形成に関する話も印象的だった。同世代の工業系大学の学生とも意見交換を行い、技術分野における男女のギャップについて考えるきっかけにもなった。また、金沢市の方との対話を通して、地方の人口流出や交通の不便さ、家庭環境などの課題にも目を向けることができ、地域社会とジェンダーの関係性について理解を深められた。



日本女性会議では教育や自己分析の重要性が繰り返し語られ、理解を深めるためには、自分自身を知ることが出発点であると述べられた。

今後の活動として、私は現在大学でITを学んでいるので、その知識を活かして、今後は、ITと社会的課題の両面からジェンダー理解を広げる方法を考えていきたい。例として、幅広い年代に向けた性教育支援チャットボットのようなアプローチができるのではないかと興味が沸いた。

また、ジェンダー平等や男女共同参画の推進には、知識だけでなく、実際の対話や体験を通じた理解が欠かせない。だれか一人で発信・情報をキャッチし続けるのは難しいため、性的マイノリティ当事者の声を直接聞ける対面イベントの開催など、興味のない層にも自然に届くような発信の工夫が必要だと感じた。

